

「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクト

インタビューシリーズ第8回：生活環境学部 増井正哉先生

生活環境学部の増井正哉先生は、住環境学科で建築・住居史をご担当です。歴史的な建造物の保存と活用がご研究のテーマとのこと。建築という理系的・技術的な領域と社会や歴史とを積極的につなぐお仕事をされつつ、JABEE（日本技術者教育認定機構）の認定制度を本学に導入・運営するのに中心的な役割も果たしておられます。



■ 専門教育に対する外からのニーズとの葛藤

——増井先生のご研究を簡単に説明していただくと、どんなことになりますか？

「一言で言うと、歴史遺産の保存と活用と言っていたら結構です。授業では「建築・住居史」を、大学院では「歴史遺産保存活用演習」などをやっています。」

——住環境学の学生さんを教えておられて、今の奈良女の学生さんの専門教育と教養教育での学び方について何か思われることってありますか？

「京大に教養部があった時代で、私は工学部卒ですが、専門は完全に教養と分離していました。教養部と工学部の生活って、やっぱり違いましたね。工学部のなかでも私のいた建築学科では、1年生の時から専門科目が入っていましたが、1科目とか、そんなものでした。図面とかスケッチをするぐらいで、本格的には3年生からの専門科目に取り組みました。」

「今は1年生からどんどん専門教育が入ってきていて、学生の選択肢が少なくなってきていて、気の毒だなあとします。住環境学科は、専門技術者を養成するという、一つ使命があるところで、しかもその専門技術者の専門性を社会的に保証する資格があって、社会の要求や制度上の要求がカリキュラムに反映されてくるわけです。そうすると、一般教養でいろいろと知見を広めたり、自分の思索の範囲や幅を広げることが非常にやりにくくなってきますし、学科の独自性を活かしたカリキュラムが難しくなってしまいます。」

「例の建築士の耐震偽装の問題がありましたよね。いわ

いる姉歯事件です。あのあとに建築業界から大学の建築教育に対して、「社会で建築士としてやっていくような教育を本当にしているのか」という強い批判があり、建築士法が改正されました。それまでは「大学の建築系学科・住居系学科を出ていれば卒業後2、3年間で1級建築士の受験資格がある」となっていたのに、結構細かく科目指定をしてこられて。私たちは大学人ですから建築学会を通じて「いや、そんなもんやないんですよ」ということを国土交通省に申し入れましたが。専門技術者の社会的な常識とか、広い教養だとか交流だとかいうことが、技術偏重みたいな教育の中で疎かにされてきたために、あんなふうな事件が発生しているというのが私たちの主張でした。」

「私たちとしては、技術者教育としてはやっぱりきちっと専門家として成り立つようにしてあげたいし、もう一方では大学生活の中で、やっぱり将来、専門技術者として、その基礎になるような、人格形成すること、幅広い教養を身につけること、それからいろんな思考力をつけることについて、よくやってもらいたいなと思っているんですが、一方では、専門教育に対する外からの強いニーズもあります。学生たちも資格志向が強く、あんまり役にたたない授業聞きたくないとかね。私の科目などもそうですが。」

■ JABEEのとりくみに学ぶ

「もう一つ、学科の専門教育のカリキュラムに外部から大きく関わるのはJABEEです。実はJABEEと建築士の受験資格は、直接は関係ないんです。これは、工学系のいろんな技術者教育の世界標準なので、まったく別物で。これをやるとカリキュラムにまとめたたん、また建築士法の改正で全然違う要求がきましてね。学

科としてはしんどい思いをしました。」

「JABEE って本来、学習・教育目標を立てて、それに対応したカリキュラムを組み、それが実行されているかチェックし、さらなる改善をすすめていくものです。他の先生のシラバスを見ることなんか、あまりないと思うんですが、私たちは、それぞれの授業の前後関係とカリキュラムの流れをチェックしていったら、それで「この授業の次は、これですね」ってことを学習・教育目標ごとに、やっていく。こういう自己点検は、学習・教育目標がはっきりしている場合には、すごく有効な手段かなと思いました。学習・教育目標には、体力・持続力をつけるとか、広い国際視野を身につけるとかも書いてあるんです。そういう中で、教養教育もカリキュラムに組み込んでいくようにしていたんですが、現実的にはうまくいかない部分もありました。」

「私たちとしては、トータルに、こういう人材を育てたいということに対して、きちっと科目バランスがとれているとか、カリキュラムが整然と流れるのかということを検証できたのはよかったし、それからもう一つは、他の先生がどんなことを教えていて、自分が全体のカリキュラムの中で何をやっているのかということについての自己認識をもてたことが、JABEE をやってよかったことのひとつです。」

「今回、非常勤講師の削減が行われました。やっぱりそういう幅がないなんて、ホント情けない話だね。こういう事態にあって、自己点検やとかPDCAとか、やらされることは面倒くさい話なんですけど、逆にこれは自分たちがやりたい教育を正当化する、ある意味、チャンスやと思います。学習・教育目標をたてカリキュラムつくる段階で、「非常勤にこういう先生を呼びたい」ということを、考える際に「遊びしろ」というと何なんですけど、学生の教養の幅広げようなところを上手にカリキュラムにつくって置いて、「私たちはこういう教育をしたいから、ここの部分が必ずいるんや」ということを、ちゃんと言う。そういうふうを考えていけばええのかなと、私は勝手に思ってます。」

■ 教養教育における実践的フィールドの意義

——建築家を育てていくために理念として、こんな教育が必要、特に教養という面で、といったアイデアがあったら教えていただきたいんですが。

「うちの大学にあっているかどうかわかりませんが、ね、チョイスの幅があること、たくさんの種類の教育を提供してあげるのがいいと思います。やっぱり人文科学、自然科学があって。できるだけ専門の先生が、

教養的な科目をたくさん提供してあげてほしい。もう一つは、共通のフィールドというか、あるいは共通の教育方法みたいなものを掲げて、そこでいろんな学生がそのプログラムに入ることによって、いろんなことを学んでいくというやり方への期待があります。」

「たとえば理学部の紀伊半島をフィールドにした科目などをみていると、学生は現場に行っているいろんなことを語る。理学部に限定されていますが、僕は生環とか文学部の学生でも、人と自然とか、人の営む自然とかをトータルにふれて学ぶとか、そういうあり方があってもいいと思うし、実は私たちが「現代GP」でやりたかったのは、そういうことで。奈良というフィールドが、実はいろんな意味ですごくいろんなことを経験し、幅広い視点をもった学生を養成していくには恰好の環境かなと思うんです。」

「今までGPというのは学部単位でしか認められなかったのが、それを「社会連携センター」という名を借りて3学部でやろうとしました。こういうことは、多分、教養でしかできないんですね。ある人は奈良の自然環境を勉強する、ある人は商店街を、ある人は歴史的な環境をやったりということで、そういう実践的なフィールドを教養にもつというのは、大事なことで。」

■ インターナショナルなものを、あえて「奈良」で育む

「「奈良」という対象に限定されますが、いろんなアプローチがありますし、地域の住民の方と触れることもできるし、もう一つは自然と触れる。それから現実的にそこにある都市環境、建築もいろいろあって感じて触れることによって、幅広い視点とか、コミュニケーション力もできて、同じ一つの対象に対し、いろんな見方があるのを知る、その中で自分の立ち位置を確認していく。フィールドに出て行って実践するってのはすごく大事なことで、奈良は、すごく環境的にいいのと、スケールのいい。それをできたら教養のカリキュラムの柱になる感じでカリキュラム編成したらいいなと思っていました。」

「「奈良」を対象に限定することは、ローカルなサブジェクトに過ぎないという批判が自然科学系の先生からありました。僕は、地域とのかかわりとか、地域との取り組みとか、歴史的なものに対する接し方というのは、方法論からみたら、それ自身、インターナショナルなものである。そういう環境とか歴史文化、自然への接し方、考え方、付き合い方みたいなものは、インターナショナルなものだと。そこを学ぶには、奈良は恰好なフィールドやなと思います。極端な表現ですが、奈良のことを学ぶというのが究極的な目的ではなくて。」

■ 「複雑さ」を担保する教養教育

——教養向けの科目として提供しますというよりも、専門か、教養か、わからないような感じになりますよね。その差は、どんなふうに？

「従来の教養教育みたいな枠ではなく、教養か、専門かって分け方自身、ちょっと古いのかもしれませんがね。その時に社会に出て専門家になったり、いわゆる学士として立っていくための素養形成みたいなものとしたら、明確に線を引く必要もなく、低学年で取り組むチャンスをいろいろ提供していく。中学年でいろんなことを取り組むチャンスを与えて、で、もうちょっとだんだんだんだん専門性がしぼまってきた時に、かつてのこういう知識を生かせるっていうのが理想かなって思います。明確に線を引くのではなく、複雑なループが飛んでいるっていうかね。ルーツが広がっているっていうか。なんかそういうふうな仕組みで。」

「僕自身の学生時代は、高層建築の設計の話よりも、どちらか言うと発掘で掘ったり、まちの古い資料を見たりするほうが好きやったし、美術系の話も好きでしたし、建築の芸術教育よりも、そのほかのほうが僕は興味があって、そっちのほうが役立てたなあって、今、思います。今の学生さんがそういう場をなかなか自分で開拓できないのであれば、そういうチャンスというか、面白い餌みたいなのを投げといてあげる必要があるでしょう。」

■ 学部卒業生に身につけてほしい力

——先ほど「学士として立っていくための素養」とおっしゃいましたね。今の学生が卒業する時、どんな力を身につけてほしいとお考えですか？

「ちょっと難しい話になってきました。専門家教育の立場でいうと、知識技量として、スタンダードな水準が大体ありまして、たとえば図面やったら、この程度描けるとか、構造計算やったら、こんぐらいできるとかね。おそらく技術系のところは、みんなあると思うんです。でもそれは技術者として立っていくことであって、もう一つ、大学で4年間過ごしてきたものとして立っていくということもある。僕はそれを学士と今、言ったんですけども、4年制大学を出た人間っていうぐらいに考えてもらいたいと思います。大学時代に培ったいろんな経験とか、あるいはそこで得た知識っていうのは、当然、技術的な知識、技量の周りにある「人間力」と言っておきましょう、そういうものが4年制大学を出た人の力量として考えられると思うんです。」

「というのは、少なくとも技術、たとえばこれが技術の必要な図式体系としたら、普通はもっと幅広の裾野の上に乗っていないと、おそらくやっていけないと思います。いろんな経験をするっていうこと。学生だとクラブ活動とかになってくるんでしょうが、大学が提供できる範囲でいうと、人間的な素養とか思考力とか、妄想力も、ですが、そういうものを広げていくような、大学としての上手な仕掛けといったものでしょうか。学生が食い付いた時に、その幅が広がっていく、ちょっと深くなっていくとかいうものを、いっぱい落とし穴みたいにつくっておいてやるというのが、大学の「教育力」とちがうかなと思います。」

「残念ながら、今、先生にも余裕ないし、学生にも余裕ない現実がありますが、理想をいえば、そうです。真下だけにある土台だけではなくて、裾野の広さが必要で、「学力」はそういう広がりの上にあった、専門家としての力とっていいでしょう。学力という意味ではなく。」

「さらに言うと、基礎的素養というか、日本人として依って立つ文化の素養っていうか、そういうのがないんですよね。今ね、学生だけでなく、社会全般に完全に抜けている。」

■ 教養教育再編への期待

「今の教養の形っていうのは、「旧来型の科目というものを、おそらく科目をソフトにせい」っていうんで、なんか「数学原論」みたいなのを「たのしい数学なんとか」に名前を変えていますよね。それから統合って、なんか複合的なものをつくって、オムニバスにしてやっているってこと。結局、旧来型の延長なんです。そこで今回、バサッと何かを出されるっていうのは、すごく期待してます。ほんまに。」

——むしろ教養っていう言い方を、一回やめちゃってですね、同じコンセプトで別のものをつくっていくっていう。

「そのほうがええかもしれません。一回、ガチャポンしたほうがいいのかも。ずっと昔を引きずってるでしょ。今の科目っていうのはね。ルーツたどれば、科目名は変わっているけど、聞くと昔、なんとかっていう科目やったとか、言いはりますからね。そういうこと考えると、もうガチャポンしたほうがいいのかも说不定ね。」

(2011年10月20日 インタビュー：甲斐・西村)

インタビューシリーズ第9回：生活環境学部 植野洋志先生

植野洋志先生は、生活環境学部の食物栄養学科で応用微生物学をご担当です。また、2004年から3年間、本学の附属中等教育学校の校長先生も務められました。研究者総覧を拝見すると、研究課題には「麹、漬け梅、バイオ燃料、キノコ、カラス、味覚シグナル、アレルギー、塩味…」といった、きわめて多彩なキーワードが並んでおり、興味津々でインタビューに伺いました。



■ 生化学との出会い

——植野先生はご専門が多彩でいらっしゃいますが、一言で言っていただくと？

「専門は生化学なんです。たまたま当時の食物学専攻(現在の食物栄養学科)で応用微生物学という生化学に近い領域を担当させてくれるというので、こちらにまいりました。生化学は化学と生物の間を学問し、その間だったらなんでもいいというのが私の解釈です。日本の大学は、アメリカの大学と比べて、生化学を専攻するところが少ないのが現状です。」

「理学部、工学部、薬学部、医学部、農学部にも生化学系がありますけど、それぞれの専門にこだわらず、お互いいろんなことが重なっているんで、一緒にまとめたほうが効率的でいいのではないのでしょうか。最近では、生命科学という新しい研究分野ができていますが、ああいうのが本来の姿ではないかと思っています。自身の専門にこだわればこだわるほど、微視的な目で物事を見る傾向にあり、大きな問題を研究対象とできないように思えます。」

——先生が海外で学ばれたきっかけはなんでしょう？

「私は、京大工学部では福井謙一研究室(注1)にいたのですが、私たちの頃は、学部定員の3分の1しか大学院進学ができなかったんです。私は理論が好きで福井研究室に入ったのですが、自分自身、力不足を感じて分野替えをしたいと思っていました。そこで大学院では生化学の分野に行きたいと思ったのですが、生化学の勉強をしていないから院浪しないとならない。そのときにアメリカから帰ってきた先生が、「植野君、アメリカやったら文学部からでも大学院の化学に行くんやで」と。実際に、学部ではイングリッシュ・リテラチャーを学び、大学院ではバイオケミストリーを専攻した人がカリフォルニア大学で研究されておられ、その人は後にノーベル賞をもらいましたよ(注2)。分野替えを許されるのがアメリカの風土らしいので、私も「そうか!」と思ってアプライしたら、たまたま受け入れ先がありました。それがブランダイス大学大学院です。もしそのアプライがダメだったら、どこかでくす

ぶっていたかもしれませんが、たまたまこういう機会があったので、思い切って飛び出しました。」

(注1：1981年ノーベル化学賞受賞)

(注2：H. E. Varmus, 1989年ノーベル医学生理学賞受賞)

■ アメリカ留学経験から学んだ教育のあり方

「私が学んだブランダイス大学は、戦後ユダヤ人が自分たちのお金で建てたアメリカで最初のユダヤ人の大学なんです。そこはユダヤ人がすごいお金を寄附し、アメリカ中のチェアマンクラスの先生方を集めて、最先端の機器が並んでいました。そういう先生方がバーツとおられてびっくりしましたが、教育にすごく力を入れておられて、教育とはなんなのかを初めて経験した気がしますね。私がよかったのは教育熱心な先生方に出会えたこと。授業に出たら、黒板の両側に20くらい文献(ジャーナル)を書かれます。これらの論文の内容をその日の講義で解説するんです。どうデータを解釈するか、それで何を証明するのか、というレベルで授業がはじまる。授業が終わってから、私たちは一斉に図書室に飛び込んでいって、文献を読みあさったものです。教科書はないのですか?と質問したら、そんなものは10年古いから役に立たない、と叱られました。」

「アメリカに行って学んだのは、院生は自由になんでもできるということでした。研究に関して、先生に「あれをやれ、これをやれ」と言われてやるんですけど、自分のやりたいことや、先生の専門以外の手法でもさせてくれる余裕があって、隣の建物の先生のところに行行って実験してデータを持って帰ってきてもよかった。こういうふうに自由にさせてくれたので、やる気のある学生にとってはいい環境だったと思いますね。一方、日本では同じ学科であっても、隣の部屋でどんなことをしているのかも知らないし、興味がないことが多い。これではあかんと思いました。」

■ 多元的な学びの「場」を提供する

「以前に、波長の合う人たちを他学部から集め、近隣のこれはと思う人を呼んできて、学生の前でセミナーを

してもらっていたことがあります。その後では、飯を食いに行き質問したり雑談したりする。その時、学生たちには必ず言うのです。「これを集中講義と思ったらあかんで。こういう先生は分野こそ違え、なにか持っている。何十年も同じ研究をしてきているという、そのことを聞くんや」極端に言うと、「先生、こんなおもしろい研究をなんで20年もしているんですか。そのことを聞け」と。学生だったら聞けるんですよ。そうすれば、「そもそもこういうことではじめたんや」ということが聞けるんです。すると学生たちは、「そのきっかけは自分たちが、今やっている実験と一緒にや。自分と重なる部分がたくさんある。」

「ただ所属する分野とか使う材料が違うだけで、サイエンス、思考は一緒や」ということに気づき、研究により興味を持つんです。ただ講義で教えるだけが大学の教育なのか。教育は「してやる式」ではダメ。「場」を提供することが大事で、しかも「場」というのが多角的でないといかんと思います。私は、日本に帰ってくる前に約10年間ロックフェラーにいたんです。そのときに月に1回、10ドルでディナーを食べながら、ニューヨーク中の将来ノーベル賞をもらうんではないかという、生命科学の分野の若い先生方が来てしゃべってくれるような会があったんです。そういう環境が好きでね、それを再現したかったんです。異質な研究者が集うセミナーがあるような環境に、一時期でも出会えたことは私にとって幸せだったし、巡り合わせがあったのかなと思います。」

■ 奈良女の学生たちの学びについて

——そういう体験をされてこられて、奈良女の学生たちの学びについてはどのように見られていますか？

「奈良女に赴任した当時は、学生は熱心に授業を聞いてくれました。理解してくれているので、期末試験は問題ないと思っていましたが、いざ試験をすると全然できない。自分の考えを表現する記述式の問題だったのですが、「なんでやろう？」と思っていたら、どうやら復習ができていないというか、日頃から自分が興味を持って入学してきて学ぼうと思っている内容に取り組んでいないように思えました。その理由として考えられたのは、寮の仕組みなのか、地方から出てきて、バイトの仕方を教えてもらい、4年間でバイトのプロみたいになるんですね。それから化粧やら、洋服やら、旅行やらの楽しみを覚えて、次第に学問から離れていくように思いました。」

「せっかく興味を持って、人生の目標としての専門分野に入ってきたのに、教えられるだけで興味を湧き立た

せることに失敗して、異なる分野に就職する、という悪循環をしているように感じました。自ら進んで学問する姿勢にはなかなかいきつかないように見えたのです。そうした悪循環を断ち切る解決策の一つとして、「eラーニング(24時間学習システム)」を取り入れました。これはネットを活用し、反復練習により、講義の要点を毎回一つでも頭に覚えこませることをめざしたものです。このシステムを活用することで、学生たちはより高度に理解するようになったと思います。」

■ 大学における教養教育と専門教育のあり方について

「教養が学んで身につくものならば、だれでも教養を身につけることができます。問題はその学び方に問題があるように思います。教養教育と専門教育を分けること自体がおかしく、それは高校などで理科を分割して教える科目制度と重なります。サイエンスの分野では語学があつて、論理的なものの考え方があつて、化学、生物、物理などの垣根がないのが原則なのに、教育を施す側の都合で高い垣根を設けてしまっていますね。私は、高校までの、いわゆる百科事典を詰め込ませて、知識を反芻できるようにする教育を大学の初期段階では脱却し、知識を「シャッフル」して、自分の興味ある領域で使いこなす「技」を学ぶことが大学教育だと考えます。しかし実際には、入学時の学生たちは「食えることや調理することに興味があります」と言いますが、卒業時にあらためて聞いてみると、ほとんど食べ物に関する専門誌や本屋って売っているその手の雑誌を読んでいないんですよ。興味があるんですが、勉強というか、自ら学習することを行っていないように思います。」

「私はあと数年すると、大学から離れていわゆる老後の生活に入るわけですが、一般的に退職して元気な方は、畑仕事やダンス、語学の学習などで余生を過ごすようです。六十の手習いでしょうが、数年するとプロ顔負けの腕前になります。どうして学生は卒業時にプロ顔負けの腕前にならないのだろう。定年退職者は興味を持つことに取り組んでおり、自身でそのテーマを自習し習得しているのではないのでしょうか。学生にはその過程が見られない。授業は先生が勝手にしゃべって、自分はそれを聞いてノートを取り、試験を受けて単位を取る。あまりにも受け身で、積極的に学ぶ姿勢が感じられません。」

■ 20年先を見すえた教育を

「我々の分野では『ネイチャー』『サイエンス』にトップクラスの研究が載るのですが、若い人は「ああいふ雑誌に載っている研究をしてみたい」と言うんです

よ。でも、すでに載っているものを今から研究しても、20年先には時代遅れになってる。これから20年先に載るような研究を今からしないといけない。そのためには、テーマを人の真似だけをしていたら、誰も面白いと思ってくれない。「あなた、おもしろい研究してますね」というテーマにしていけないと。物真似ではなく、独自性を打ち出すことがとても大切になってくる。私が学生を教育するのは、今役に立つから教育をしているのではなく、20年先に役に立つような教育をしてあげないといかんと考えているから。でも、大学全体としては、そのことがなされてないんですよ。」

「奈良女子大の戦略としては、ここの卒業生をもっと大事にしなければいけない。ここに入って来た学生たちが将来、ここで教鞭をとれるような形を、きちんと残していけないとだめです。ところが今、それを潰してしまっていますからね。講座制を廃止して助手のポジションをなくしたというのは、そういうことですよ。ここの人は育ちませんよ、外部から採ります、と言っているのと同じです。生活環境学部でも、科研費の固有の分野を持っている講座は強いです。そういうところは奈良女はトップなので、その分野の人材は、ほぼ奈良女の卒業生で占められている。だから常に人材を入れたり出したりできるんです。ところが食物は固有の分野を持っていないので、生命科学の分野の競争に入っていって取り合いをしなければならない。大変です。」

■ 研究の喜び

——研究の後継者を育てる、という意味で、先生の研究室では、学生のモチベーションは如何ですか。

「幸い、私の研究室は総じて優秀な学生が来てくれます。恵まれていると思います。学年にもよりますが、結構な進学率なんです。4回生、大体4～6人くらい入ってきますが、半分は京大などの他大学の大学院に行き、半分は奈良女に残ってくれます。最近は博士まで行ってくれるんですが。みんな頑張り屋さんですね。来てから研究がオモロイと思うようになる学生が多いと思います。」

「研究テーマは一緒に決めても、それをどのように料理していくかは学生一人ひとりが自分で考えて、自分で文献を調べて、自分で失敗して、そこから成功に導いていかないと。私たちはあくまでそのアドバイザーですから、そこを間違ったらいいかん。そのところがきちんとしてできると、学生は一人立ちしますよ。時間はかかるんですが。面白くなってきたら上に行こうと思いますし。面白くするところまでが、しんどいんですけどね。そういうことは、していけないといかんとしますね。」

——私（西村）の「教職論」の授業で、印象に残っている先生のことを書いてください、というミニレポートを書いてもらうのですが、その中で「中学時代に、始業式も終業式もタンパク質の話ばかりする校長先生がいて、私はその先生にあこがれて、この大学に来ました」というのがありました。よく見ると、植野先生が校長をされていた時代の中等教育学校の卒業生でした。先生のお話を伺っていると、その学生の気持がよくわかります。学生に研究の魅力を伝えるために、いろいろ工夫をされていますね。

「いろいろあります。脳の研究もしているんですけど、脳の神経伝達物質というのはアミノ酸なんです。それをつくる酵素を舌の上に見つけました。それが塩味に関係する、つまり塩味の情報を神経に伝える間にその酵素があるらしくて、そうするとその酵素活性に影響を与えるものは味覚改変物質となり、従来とは違う減塩食品につながる可能性が出てくる。違う角度からキノコの研究も行っていて、菌がつくる酵素がほしんです。キノコは木の根っこに穴を開けて共生しますから、木を溶かして穴を開ける技術を菌は持っているんです。それをきちんと理解できれば、東日本の震災の瓦礫、今から掃除に100年かかるというけど、あれを液状化して全部アルコールに変えることができるんです。そうすると原発なんて要らんのです。エネルギーに変えることができるから。そういう研究は、今まで食の分野ではあたりまえやったんです。お酒造りの基本はそこですから。ただ材料が、固い木からつくるのと、米からつくるのとの違いだけでね。切ってしまうえば一緒のものになりますから、切り方の問題なんです。お酒は麹菌でお米を切っていますけど、キノコの菌で木を切れればいい。そうやって環境の分野にも片足を突っ込んでいますが、食と環境は背中あわせですからね。ここで育った人が、どんどん、そういうところに行っていきたいと思います。」

——本当に楽しそうに研究を語る先生のお姿に、奈良女が学生を育てる大切なヒントを見せていただいたような気がします。長時間、ありがとうございました。

(2011年11月24日 インタビュアー：藤井・西村)

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニュースレター 20 ■

2011年12月25日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 204

TEL：0742-20-3352

Website：http://www.nara-wu.ac.jp/crades/